

信仰は教えられるか

吉岡 良昌*

Can Faith Be Taught?

YOSHIOKA Yoshimasa

At a Christian church and a Christian school there is the task of teaching faith as an important aim of education. In this essay I have tried to clarify the meaning of what faith is and what teaching the faith is, while at the same time demonstrating that faith and personality are related in personal formation of persons at both institutions. I have argued that if there is a faith community at both institutions, the task of teaching faith is possible. Moreover, as an act of the personality as a whole, faith can integrate the total personality with the dimensions of cognition, affection and behavior. Therefore, teaching faith is a very important task.

キーワード：信仰、信仰教育、信仰共同体、人格の統合

key Words：Faith, Teaching Faith, Faith Community, Integration of Personality

はじめに

キリスト教教会やキリスト教学校が目指す教育の主要な目的のひとつに信仰教育が挙げられる。信仰告白をして信仰生活を続ける人生は神に祝福された人生と考えられるので、キリスト教という宗教教育の目標が信仰獲得にあることは一つの重要な教育目的である。キリスト教学校教育の目的としては、これ以外の言葉で表現されることが通例であり、キリスト教に基づく人間形成や人格教育という言葉が使用されている。これは教育機関の置かれた社会的機能からの表現方法であり、学校は教育における人間形成を目指すのであって、信者獲得ではないという言い方で端的に表現されている。しかし、キリスト教価値観に基づく人間形成を多くのキリスト教主義学校が建学の精神として掲げているということは、キリスト教が与える人間の生き方のすばらしさを前提にしている。このキリスト教価値の主要なひとつが信仰であると考えら

れる時、学校教育における信仰教育の課題というテーマを設定することができる。このような両者の関係を取りあえず、教会制度の場合は、信仰教育を直接目的とする一方、学校教育は間接的目的もしくは結果として信仰教育を行うという言い方で表現しておこう。いずれにしても、直接的にせよ、間接的にせよ、両者の機関は信仰教育を大事な宗教教育の目的として掲げていることになる。ここではこの目的を前提として、信仰教育は、教会教育やキリスト教学校教育においてどのような方法においてなされるのか、また、信仰教育とは一体どのような教育原理に基づいてなされているのか、この問いを教会教育とキリスト教学校教育の両機関に投げかけてみたい。この考察を通して、今回は両者の違いというよりは本質的に同等であると思われる信仰教育の本質は何なのかを検討したい。そしてこのような考察と検討を通して信仰に基づく教育の活性化を両機関に促したいと願っている。

* 東洋英和女学院大学 人間科学部 教授
Professor, Faculty of Human Sciences, Toyo Eiwa University

実践的動機としては以上の問題意識に基づいているが、理論的動機として「信仰は教えられるか」というテーマの下に、果たして信仰は教えることが可能なのだろうか、という原理的問いを今一度確認しておきたい。この原理的問いの答えが曖昧であるとき、実践としての信仰教育は本当の真剣さをもって機能させることができないと考えるからである。従って、最初に、この原理的問いかけの解答を採る作業が必要になる。この問いかけの答えを採るためには、神学的考察と教育学的考察の両者が不可欠である。神学的考察として、「信仰とは何か」が論じられ、教育学的考察として「信仰を教える」とは人間形成や人間の成長発達とどのように関わるのかということが論じられる。以下、信仰とは何か、信仰教育とは何か、について論じる。

1. 信仰とは何か

信仰教育における信仰とは一体どのような性質や特徴をもつものなのか、この考察がまず不可欠である。信仰の本質と動態についてパウロ・テイリッヒの見解と対話をしながら、信仰が特に信仰教育との関連で見た場合どのような性質と特徴を有しているのかを考察したい。

1.1 テイリッヒによる信仰についての見解¹

信仰ということばは、数世紀の遺産を有する強力な伝統を担ったことばとして、今のところこれを別のことばで変えることは不可能なので、少なくともよく再解釈して混乱と歪曲を取り除いていく作業をしたいと、テイリッヒは序論において述べている。将来信仰に変わることばとしてスピリチュアリテイ（霊性）ということばで代用する時代が来るかも知れない。²しかし、今、必要なことは、信仰のことばを再解釈してさまざまな誤解や歪曲を取り除く作業をすることであろう。

信仰についての神学的考察をするとき、神への信仰という視点のみで、神の働きかけの応答としての信仰の機能について論じられるケース

が多い。しかし、テイリッヒは人間学の視点から信仰という心の機能が人間の人格的機能とどのように関係するのかという視点も併せ持って論じているので、すでにこの論じ方自体が教育学的発想と深く関係しているという意味で、テイリッヒの議論は抜かすことができない。

第一に、テイリッヒの信仰の議論の特徴は人間の普遍的現象として信仰ということばを用いていることである。テイリッヒは信仰とは何かの問いへの答えとして「究極的な関わりとしての信仰」という哲学的用語で答えを提供している。³この定義自体、キリスト教を超えたすべての宗教の「信仰」を、したがってキリスト教の教派による信仰の理解の差やプロテスタント、カトリックの信仰理解の差をもすべて超越した「人間の信仰心」という普遍性を含めて定義している。このような意味での信仰理解はスピリチュアリテイという言葉で表現し直せる内容であるといえる。すべての人間がもつ信仰心という意味での普遍的現象としての「信仰」の定義である。しかし、テイリッヒ自身はこの定義をキリスト教的な意味で使用する場合、申命記6：5の「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」という神のイスラエルへの戒めのことばを念頭に置いている。他方、世俗的なもう一方の例証として「成功」を取り上げ、社会的地位や経済的成功への究極的関わりという偶像神を信仰の対象とする例を取り上げて説明している。すなわち、人間の心の究極的関心事はすべて一種の「神」という対象を作り出し、それが信仰の対象となりうることを説いている。

「究極的な関わりとしての信仰」と言う信仰の定義の下に、キリスト教信仰以外の諸宗教の「信仰」や世俗的信仰や人間の宗教心一切を含めて、「信仰」という言葉を使用し、テイリッヒ自身はキリスト教信仰を具体的に想定している点、宗教的多元時代を迎えた21世紀の文脈においては、曖昧であり、抽象的過ぎるという批判が加えられるに違いない。従って、本小論においては、具体的には主としてキリスト教信仰を指し

示すという解釈をもってテイリッヒの見解を受け入れて置こうと思う。イスラム教の信仰や仏教の信仰理解については別途論じなければならないということである。従って、ここでは、信仰の対象をユダヤ・キリスト教の神と限定し、この神との生き生きとした関係を保っている人間の存在の在り方を信仰と考えておきたい。

次にテイリッヒの信仰理解において特徴的な点は、信仰は人格のすべての活動に深い影響を及ぼすものであり、従って、信仰は人格の中核における中心的活動であるという見方である。この人格の中心性という議論は人格の構造の無意識的諸要素をも統括する作用として人間の精神状態全体を規定する性質をもっている。人格の包括的活動としての信仰は「脱自的」ecstaticであるという。「脱自」Ecstasyとは自己が自己であることをやめないで、すなわち、自己の人格的中心に統一されているすべての諸要素を失うことなしに、「自己自身の外に立つ」ことを意味する。⁴この信仰の超越的性質のゆえに、信仰はすべての人間の諸機能の働きを統合し、統一して、信仰の対象である一者（神）へと人格全体が傾くということである。テイリッヒによれば、自由とは人格の中心的活動そのものであるので、自由と信仰は同一であるという。したがって無意識的な衝動も信仰という人格の統括作用によって強制されることなく、自由にその働きが行使されて意味のある人格的行動のエネルギー源となる。このように非合理的な無意識の衝動も合理的な働きへと「昇華」されるという。このように、テイリッヒの信仰の議論は20世紀の精神分析学が到達した無意識の心の機能の働きを解明をも取り入れている点で新しい信仰理解といえる。信仰は「人格の中核における中心的活動である」という理解は、信仰が人間のパーソナリティ全体に影響をもたらすという認識の故に、人間学的教育論に深く関わるということである。

しかし、このような人格の統率力も、誤った信仰に陥る場合、すなわち、有限の対象や、人間の有限な性質に究極的信頼を置くとき、人格

は自由を失い、崩壊と分裂を招来させ、人格全体は分裂の様相を呈してくると仮定している。この議論は信仰の対象を誤った方向や宗教の軽視風潮において青少年の心に究極的な空洞を作り出す教育に対する警告として受けとめる必要がある。

第三に、信仰はすべて信仰共同体を必要とするとテイリッヒは述べている。⁵なぜならば、信仰は言語なしには成立しないからであり、かつ、言語は精神的存在者の共同体においてのみ生きることができるからである。宗教的言語や象徴的言語や神話としての言語は、信仰者の共同体の中で、創造され、理解される。信仰の共同体の一員としてのみ、人は究極的関わりとしての対象をもつことができる。信仰の共同体なしに信仰はありえない。これが信仰の現実的形態である。この信仰共同体は信仰の言語の信条的表現をもってその信仰の基準とみなしているが、しかし、これら信条的表現自体を究極的無制約的なものとみなしてはならない。これら信条の任務は、むしろ、それらの言葉を超えた究極的なものを指し示すものでなければならない。これが、テイリッヒの言う「プロテスタント原理」であり、信仰共同体の信条批判であり、信仰活動の懐疑であるという。⁶同様の論理から、信仰共同体が用いる言語はすべて象徴的言語でなければならないという。聖書の言葉でも逐語的靈感説⁷に基づいて文字通り神の言葉として信じる立場は誤りである。象徴を直解主義的に、文字通りの意味に解する信仰は偶像崇拜になる。それは究極的以下のものを究極的と呼ぶようになるからであると述べている。⁸

この第三の議論は信仰共同体としての教会の教育の在り方及びキリスト教主義学校教育の具体的な教育の方法や原理の問題と直結する。特に、学校教育における信仰共同体の可否について後に論じる必要がある。

以上のテイリッヒの信仰理解から帰結される信仰形態の誤解として、主知主義的曲解、主意主義的曲解、感情主義的曲解の三つをあげることができる。

これら三つの信仰の理解の曲解はみな一つの源泉から招来している。それは、信仰は人格全体の中心の活動であるにもかかわらず、人格を構成している諸機能の一つを信仰と同一視することに起因している。信仰を認識活動の所産としての信念や理論的知識と同一視したり、信じる意志を強調する余り、服従を信仰と同一視したり、シュラエルマッヘルのように信仰を絶対依存の感情と同一視する誤りである。信仰は人格全体の中心的活動として以上の知的認識的側面と意志的側面と感情的側面の働きのすべてを併せ持っており、これら全体の協働に深く影響を及ぼすことは事実であるが、これらの一局面を信仰そのものと考えすることは誤りである。

最後に信仰と理性の関係についての議論を取り上げておく。テイリッヒは理性を技術的理性と本来の理性（哲学的理性と呼んでおこう）に二分して論じているが、本来信仰と理性は矛盾しないというのが、彼の基本的理解である。技術的理性は科学的方法や論理的推理または技術的計算という意味で用いられ、この場合、理性は現実認識と現実統御のための道具、手段として用いられ、信仰はその現実の認識と統御のための目標、理由を提供するため、衝突はありえないという。このような意味での理性は技術文明を支配する力を提供するが、その目的や理由は信仰が答えるという。もう一つの理性は、意味、構造、規範、原理の本源という意味での理性である。精神と実在を意義有らしめる構造としての理性であるという。この場合の理性は、人間における言語や自由や想像力の基礎となり、それは、知識の探求や芸術の経験や道徳の実現の中で働く性格のものである。従って、この場合の理性は信仰が働く前提条件であり、信仰は、この理性の働きを条件としつつ脱自的に自己を超える活動である。この脱自は理性の充実であって理性の破壊ではない。なぜなら、理性はその有限性を越え出る無限的可能性を意識しているが、しかし、理性は有限的理性にとどまり、究極的関わりは信仰が果たしてくれるからである。脱自における理性が信仰である。従

って、理性と信仰は相互内在的であり、矛盾することはない。⁹ 理性の充実は、究極的なもの、聖なるものの現前を経験するときに与えられる。しかし、このような経験がないとき、理性は信仰なき理性を経て、魔的に破壊された理性へと通じると警告している。以上の理性と信仰の議論は人間が疎外（罪の侵入以後の人間の在り方をさす）されていないケースを想定して述べている。しかし、現実の人間は疎外されているので、ここに啓示の介入が必要となると述べて、理性と啓示の関係について更に論じている。

ある立場によれば、理性は啓示に従属すべきであると考え、啓示内容への従属が信仰であると考えている。啓示は神が為しえたことの超自然的情報であり、それが預言者や使徒たちに神から授けられ、それが、聖書として成立している神のことばである。しかし、テイリッヒはこのような考え方はそれが、いかに不条理、不合理であろうと受け入れることを強要する傾向をもつため、ゆがめられた啓示概念であると批判している。そこで、次のように言い直している。啓示とは、究極的関わりが人間精神を動かし、それによって共同体が生み出され、その共同体において人間の究極的関わりが行動的、想像的、思惟的象徴となって表現を遂げたことの経験であると。¹⁰ そして、このような啓示経験が起る所には、どこにおいても、疎外から和解が成立し、信仰と理性の内的矛盾が克服され、両者が共に更新される。従って、このような経験においては信仰と理性のいかなる矛盾もありえない。ただし、啓示は疎外状態にある腐敗した人間に対する啓示であるため、啓示によって疎外力は打ち破られるけれども、しかし、除去されないため、真の勝利の戦闘は終局的啓示に待たなければならない。以上の主張から、テイリッヒの啓示の見解は、理性に照らして、不条理や不合理と思える啓示は批判的に対処すべき余地があると述べていると考えられる。健全な信仰は理性を超えるけれども明らかに理性に違反することはありえないという見解である。ここ

に哲学者であり同時に神学者であるテイリッヒの本領が発揮されていると言えよう。しかし、神学者としてのテイリッヒとして、啓示理解がやや消極的過ぎる嫌いがあり、この点については、カール・バルトの啓示理解や神理解を取り入れて補う必要がある。啓示の内容は理性を超えたものであり、しかも、理性的人間の在り方をも満足させるものでなければならないというテイリッヒの議論はこの点で是認できる。しかし、人類に罪が侵入し、疎外された人間の条件の下では、理性の超越的機能は方向を誤り、偶像的崇拜を余儀なくされてしまうというのが現実である。人間は自らの理性の力で神に到達することは不可能になった。従って、このような人間の罪の現実においては神からの自己啓示や神からの行動や働きかけが不可欠である。従って、理性と啓示の関係については、筆者は神の側からの自発的意志行為即ち神の側からの啓示の行為を認める、カール・バルトらの神学者の見解を支持したいと思う。

以上、テイリッヒの信仰理解をめぐって「信仰とは何か」について論じてきたが、信仰教育という視点から考える時、特に重要な信仰の特性は、信仰は人間の諸機能（知的側面、感情的側面、意志的行動的側面）と深く関わりつつ、それら全体を一つに統合して方向付ける人格全体の統合的働きを促すということである。

1. 2 テイリッヒにおける信仰の生活の見解¹¹

信仰と生活はどのような関連をもっているのか、信仰を持つと、人間の生活はどのような変化を受けるのか、この点について引き続きテイリッヒの見解から学ぶこととする。

第一の特色は信仰には懐疑が不可欠であるという指摘である。信仰には、究極的なものへの関与と、それからの分離という緊張があり、「関与」の要素から信仰の現実性が、「分離」の要素から信仰における懐疑が生じるという。従って、生きた信仰には、懐疑の要素があるために、その懐疑を克服する勇氣と冒険が伴うという。

第二に、信仰は、究極的な関わりとして、究

極的に関わるものに捕らえられている状態であるから、すべての暫定的予備的関わりは信仰に従属するという。究極的関わりは、他のすべての関わりに深さと方向と統一を与え、人間を人格として基礎づけるという。なぜなら、究極的なものは、すべての目的の根拠であり根源であり、中心であるから、人格のすべての領域に作用し、人格的生活のすべてを統合するからである。従って、人間の身体、精神、靈魂の三次元において信仰の活動は関与し、無意識、意識を貫いて作用することになる。従って、信仰によって無意識的衝動が適切な象徴的表現を与えられると、その衝動は混沌であることをやめ、「昇華」を経て、人格の意識的行動に結合されるので、もはや、抑圧されなくてもよくなる。人格生活の最大問題は、さまざまな意識内容の分裂的傾向にあるが、信仰は集中する中心目的を意識生活に与えるので、人格が多様性の中に分裂崩壊することなく、統合する力が与えられる。この信仰の統合力はまた治癒力として働くということもできるという。ただし、この治癒力は、身体や精神の特定の疾患の治癒ではなく、(この場合には医学による療法が必要となるが)人格全体に関わる治癒力である。ここでは、キリスト教信仰の場合、信仰による救いや平安を意味していると考えられる。

第三に、究極的関わりとして定義される信仰においては、実存的には分離しているが、本質的にはその対象に属している状態をさすので、その分離の再統一を願う「見神」状態を達成しようとする無限の憧憬が存在する。従って、この分離者の再統一への衝動としての愛の欲求が芽生える。信仰と愛は共に、自分が帰属し、また疎外している者との再合一を熱望する。イエスによって確認された旧約の「大いなる戒命」(申命記6:4)に基づく神への愛から、「神のもの」としての隣人と自分自身への愛が由来する。こうして、信仰は愛と行動を促す原動力となる。信仰は愛を含み、愛は行為となって表現される。信仰と業を連結するものは愛である。この意味で信仰は行為において現実化するとい

える。更にテイリッヒによれば、神によるアガペーの愛は人間のエロースの愛を伴って、現実的な愛となる。エロースのないアガペーは道徳律への服従であって、温かさも憧憬も再合一もないと批判している。また、アガペーのないエロースは、渾沌、無秩序の欲望であって、他者が愛し愛される独立の自我として承認される権利を有することを軽視するという。エロースとアガペーの統一としての愛が信仰の本質的要素であると述べている。アガペーの愛はエロースの愛を聖化するという考え方であろうか。筆者はこれまで、両者の対立のみを考えていたので注目に値する考え方といえよう。たとえば、ルカ福音書15章に述べられているイエスによる放蕩息子の例え話に準じてこの議論を適用すれば、放蕩息子を無条件に赦し愛して受容する父親の態度に神のアガペーの愛が表現されていると解釈できる。しかし、この父親の弟息子への愛には人間的な温かみを含むエロース的要素も含まれているということになる。ただし、この場合のエロースは自己中心的欲望が聖化されていると解釈しなければならない。¹²

第四に、信仰は信仰の共同体においてのみ、現実となるように、信仰に基づく愛と行為は共同体を生み出すということである。信仰はその信仰共同体をもって現実となる。そして、この信仰共同体は儀礼的象徴によって自己を構成し、神話的象徴によって自己を解釈する。共同体における生活でないような信仰生活はそもそもありえない。神秘主義者たちの孤独と独居であっても、彼らが、信仰の共同体の言語を用いる限り、同様であるという。

以上、テイリッヒの議論を中心に「信仰とは何か」について考察を進めてきた。これらの考察の中にすでに、信仰教育へのヒントが隠されている。信仰教育における教育とはいかなることを指すのかについて章を改めて考察する。

2. 信仰教育とは何か

信仰教育における教育の成立をめぐる議論においては、これを神の視点から考える神学的考

察と、人間と人間における教授・学習のプロセスの視点から考える教育学の考察の両方の視点から考察することが可能である。これら両者を相互補足的考察と考えて議論を展開してゆきたい。まず、神学的考察から始めよう。

2.1 神学的考察

(1) 神のみが真の教育者である

教師としてのソクラテスとイエスを論じたキエルケゴールの『哲学的断片』はキリスト教育哲学に対して大変示唆に富む洞察を提供している。¹³ 信仰教育は厳密に言えば、神のみが真の教育者として唯一の資格をもつという議論から始めなければならない。イエス・キリストも新約聖書において「あなた方の教師はキリスト一人だけである。」(マタイ 23: 10) と述べて、誰も教師と呼ばれてはならないと警告している。アウグスチヌスも『教師論』において「キリストが心の内面で教え給う。人の言葉は外から気づかせるだけである。」と述べている。¹⁴ 現代フランスの教育哲学者オリヴェ・ルブールも経験論と合理論の教育哲学を紹介する中で、経験論では学びはすべて外部から与えられるのに対して合理論では真理は精神の内部に潜在的に保有されており、教育はこれらの真理を単に「目覚めさせる」だけであると述べている。¹⁵ この合理論の教育哲学はソクラテスから始まっており、ソクラテスの産婆術は有名である。真理を生み出すのは神の働きであって、人と人之间にあっては「取り上げる」という産婆の働きのみが最高の任務である、という考え方である。教育は産出援助としての「取り上げ」に徹すべきであるという。¹⁶ この視点に立てば、教育者はこのような神の活動の奉仕者であって、権威を自らに主張できる教育者など世の中に存在しないということになる。真理を生み出す権威は神のみに属するからである。人間にできる教育的行為はただ「問う」ことであり、あとは学習者が自分の力で内在する真理を獲得する以外に道はない。これがソクラテスの想起説である。しかしキエルケゴールの『哲学的断片』によれば、真

理は内在するのではなく、人間は真理に背いて不真理そのものになってしまったので、回心・悔い改め・再生が必要であると説いている。だから、救助者・解放者・和解者としての神による教育が必要であり、それは「瞬間」として神からの「照明」として「信仰」という形で与えられると述べている。¹⁷ このように考えて来ると、「真理」も「信仰」も神から生み出されるものであり、人間の教育的業はただ「産婆」としての取り上げの働きにすぎないということになる。信仰や真理は果たして教えることができるのかという問いに対して、人間は、ただ取り上げる産婆の役目しか果たすことができないというソクラテスの命題をしっかりと認識する必要がある。

(2) 神は継続的教育者である。

信仰および真理を生み出すものは人間ではなく、神であるが、その神は生みっぱなしではなく、生んだものを育て、養育する神でもある。すなわち、信仰を生み出し、その信仰が成長するように教育する。神からの教育は「瞬間」的であり、神からの「照明」は人間の精神の奥底において密かに与えられるものである。しかしそれは継続的であり、断絶することは原則として有り得ない。サウル王のように王としての「油注ぎ」を神から受けても自らの不信仰によってそれを取り去られるという事例があるが、それは人間の側の強い不信仰と抵抗によるのであって、従順を続けている限り、神が一旦、信仰を与えて、自ら放棄することは考えられない。キリスト者生活で言えば、信仰によって神から義と認められるものは、その後も継続して神の霊の力を受け続け、聖化され、神が完全であられるように完全な神の子となるまで、神は働き続ける。このように神の人間への働きかけは原則として継続的であり、人間の側の反抗がなければ、最終的目的遂行に至るまで続行し、途中で放棄されることはあり得ない。

(3) 神は人間の内在的共働者である

聖霊なる神はイエスに内在してイエスの自己実現（イエスの果たすべき使命）を助け、イエ

スの昇天後のペンテコステ以来、イエスの贖罪の有効性を伝えつつ、キリスト者に内在して、神の業をなすように内的に共働している。この神と人との協力関係により人間の教育的働きや学習の働きが有効とされる。信仰教育について、信仰は神からの賜物であり、人間の働きに拠らないことを強調し、ソクラテスの産婆術を例に挙げて、「生むこと」は神に属し、人は「取り上げる」ことのみであると述べ、そのことを聖書の記述から確認した。しかし、これからは「取り上げる」人間の働きの重要性について述べていきたい。産婆という適切な援助活動がなければ、命の誕生は上手く機能しない。神は人間と契約を結び、神の当事者となっている。神の言葉はこの人間の当事者を用いて伝達され、また人間の状況に適応してご自身を啓示してきた。また、信仰の働きについても、信仰は聖霊の密かな働きかけを通して人間の心の奥底からその働きを開始する。そしてこの霊的な信仰心は時間と共に人間の感情・意志・知性にも働きかけ、人格全体を揺り動かし、その人間の日常の行為生活となって具現化する。神の言葉が受肉し、イエスの人格と行動と出来事となって地上に顕現したことと同様に、信仰も人格化し、その人の生涯において出来事となって具現化する。神の国の到来を前進させる愛と平和と正義の行いとして地上に具現化する。その神の国は教会という制度や学校という教育機関においても進展し続けるのである。信仰は神の言葉を聞くことから始まるとパウロは述べ、その神の言葉を語る人が居なければ、神の業は作動しないと語っている。¹⁸ 従って、聖書という神の言葉の経典を教える教育者の協同的働きがなければ、信仰は「生まれて」来ないともいえる。教育者は神の活動の奉仕者に過ぎない。しかし、この奉仕がなければ、神の活動は具現化しえないのである。神の霊は人の心を瞬間的に照らす一時的照明的役割だけでなく、人に内的促しを与え、信仰の行動と具現化に向けて生涯かけて働き続ける継続的労働者でもある。この密かな働きかけはその人の人格を統合し、また、この

世界を神の国にする働きを生み出し、また人々に職務を授けて、ある人を宣教者、教育者、慈善家、この世の改良者へと遣わすのである。人間は神の協働者として、その信仰の実を結ぶことができるようにこの世界に遣わされているといえる。

このように信仰の源泉は神の賜物であり、いかなる人間の努力の成果ではないことが明白である。しかし、神は、この仕事をご自分の言葉と霊によってなしつつも、この仕事の代理者として人間の働きを用いることを良しとしてきた。これは旧約聖書のイスラエル民族の神の救済の歴史をみても、新約聖書の事例を見ても明らかである。カルヴァンはこの神の態度を神の適用 (accommodation) と呼び、神の人間への寛容さと愛の表現とみなしている。カルヴァンによれば、昔のイスラエルのある者が、神の代理者として、預言者や祭司や王として選ばれ、神の職務を担うことが許されたのも、また、今日の教会制度が神の宮として牧師職や役員が神から任命されてその職務についているのもこの神の適用によるとしている。¹⁹ 新約聖書のキリスト教会の職務を考えてみると、それは復活した主イエスが11人の弟子たちに語った言葉によって明らかである。「私は天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなた方は行って、すべての民を私の弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなた方に命じておいたことをすべて守るように教えなさい。私は世の終わりまで、いつもあなた方と共にいる。」(マタイ 28：18-20) ここでは、父と子と聖霊である三位一体の神ご自身がすべての民に信仰を与え、救いを与え、弟子にする働きをする。しかしその具体的執行を弟子たちに託しているのである。そしてその弟子たちの働きをその背後にあって一切の権能を授かったイエスが支えると約束している。このように神はご自身の働きを人間に託して、その人間の働きを通して有効なものとする約束していることがわかるのである。

(4) 聖書からの証言

神が真の教育者であり、しかも継続的教育者であり、内在的教育者であるという概念を聖書の記述から確認しておきたいと思う。このような考察は神についての知識は神からの啓示による以外に確かな知識には至らないという筆者の啓示理解に基づいている。

出エジプト記 3：14の「わたしはあると言う者だ」という神の自己紹介はヘブル語のハーヤーという動詞の用法から存在・生成・活動の三様態を意味することとなり、神は過去・現在・未来にわたって存在を生み出し、その存在の生成・成長を促し、その存在の活動を終始導いて、御自身の目的へと向かわせている人格神であると解釈できる。また、このようなモーセへの神の啓示は常に神のことば (ダーバール) による啓示であり、そして、ダーバールは単なる記号や音声ではなく、神の意志の表明であり、常に真理と誠に満ちていて、必ず行為となって出来事を引き起こす力をもっている。従って、この神のことばの生成力・実行力は、人間に対して教育力となって現れている。神は「光あれ」ということばによって光を創造した如く「わたしの口から出るわたしのことばもむなしくはわたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げわたしが与えた使命を必ず果たす。」(イザヤ 55：11) と述べられている通りである。

イエス・キリストは真の教育者である (マタイ 23：10)。また、「信仰の創始者また完成者」(ヘブライ 12：2) である。わたしたちはイエスを信じると言っても、イエスを信じる対象と考えがちであるが、イエスこそがわたしを探し出し、わたしを捉えて信仰心と呼び起こし育て完成へと導く信仰の主体者である。この意味でもイエスは信仰の真の教育者である。しかし、人間イエスは幼子のようになって、ひたすら、父なる神の意志を祈り求め、従順を学び (ヘブライ 5：8)、真の学習者であったので、わたしたちにも「わたしに学びなさい」(マタイ 11：29) と呼びかけている。結局イエスは聖霊なる神の充満による促しと父なる神への服従の業をとお

して、神のことばの成就者となり生ける人格的
神のことばそのものと同一視されるようになった
(ヨハネ1:14)。

ペンテコステ以来、聖霊は人間の心に内住し、
真の教育者として、祈りを促し、父の御心に添
うように執り成し、聖書のことばと教会の礼典
と共に働いてキリストの宝物すべてを信仰者に
分け与え、義認と聖化を通して信仰者に「神の
かたち」の回復を実現させようとしている。こ
のように神のことばが能動的主体者であり、信
仰者は受動態である。しかし聖霊の励ましを受
けて能動的行動的になることができる。「恐れお
のきつつ自分の救いを達成するように努めな
さい。あなた方の内に働いて御心のままに望ま
せ行わせておられるのは神であるからです。」
(ピリピ2:13)と述べられているとおりであ
る。

以上、旧約・新約聖書を通して、神学的考察
から、父・子・聖霊なる三位一体なる神が真の
教育者であり、人間はこの神の教育的働きの協
働者・代理者として教育の働きに任じられてい
ることを確認した。

2.2 教育学的考察

近代の学校はその始まりにおいて、知識教育
と技術教育に焦点を置き、宗教教育をその対象
から外してきた。しかし、ポスト・モダンの現
代において、人間の心の教育は緊急の課題とな
ってきている。教育の定義をラテン語educatio
の語源であるeducareに求めて「世話をすること
」と定義し直して、教育の働きを「命へのケ
ア」と見做して考えてみると、最近の教育学の
動向としてネル・ノディングス(スタンフォ
ード大教授)の「ケアリングとしての教育論」が
参考になる。²⁰ 学校教育をteaching教授の場
だけでなく、caring世話とhealing癒しの場所と
して要請されている現代の教育の現実に注目し
たい。人間の教育は子供の命の世話をする親に
その原型があるが、高等鳥類以上の動物はみな、
「生み・生まれる」関係から「育て・育てられ
る」関係へ、そして「教え・教えられる」関係

を維持している。²¹ 従って、教育とは子供の命
の世話をして成人まで教え育てること(人間形
成)と定義する時、近代以降は教育の分業(専
門化)がなされているので、その考え方にした
がって教育の領域を分けると、身体的生命のケ
アは家庭、知的精神的生命のケアは学校、霊的
生命のケアは教会(宗教機関)という教育の分
担が成立している。従って教会教育の領域は人
間の霊的生命に従事することとなる。現在は聖
霊なる神の活動期間として聖霊が人間の霊性に
働きかけて教育している。しかし、人間の側か
ら言えば、霊的生命は同時に身体的・精神的生
命の活動と不分離の状態にあるため、結果とし
て、霊的生命の活性化は全人格に影響を及ぼす
と考えなければならない。このような心の教育
の領域が現代においては、学校教育においても
要求される時代となったという認識が成立す
る。ただし、従来教会教育の復活をもって、
現代の学校教育の欠けを補うという単純なこと
ではないので、その点の現代的修正が加えられ
る必要があると考え、その教会教育の修正版を
創造しなければならない。今回は信仰教育とい
うテーマに絞って、その応用版を提示すること
に本論のねらいがある。学校創立のもともとの
生みの親がキリストの教会である私学のキリス
ト教主義学校においては、学校教育における宗
教教育(今回は信仰教育)の意義について論じ
ることは可能であるし、またそうすることが現
代的学校教育の状況において緊急に求められて
いる課題であると考えられる。

20世紀の教育学で、例えば、ボルノーは1960
年代のドイツにおいて実存哲学と教育学の対話
を通してこれまでの連続的教育学に対して非連
続(飛躍や宗教的回心を含む)教育学の新しい
試みを始めたと述べている。²² ヘルバルトから
受け継いできた持続的形成の教育学から「古き
アダムは日々の悔い改めと懺悔に没頭しなけれ
ばならない。そして、日々に新しい人間がよみ
がえらなければならない」²³ という古いキリス
ト教の見解のルター的定式化の見解に近い非連
続的教育学の構築に向けて努力を始めたに過ぎ

ないと述懐している。そして危機に対する教育的態度や、宗教的回心をその教育学の体系の中心にすえたマリア・モンテッソリの教育学の紹介や、教会でなされる説教の事例、ブーバーに始まる出会いの教育学などを論じている。さらにさかのぼって近代西洋教育史の潮流を概観してみると、教育学と神学（キリスト教人間観）の対話はずーと絶え間なくなされ続けてきたといえる。コメニウスから始まって、ルソー、ペスタロッチー、フレーベル、デューイに至るまでそうである。²⁴ 最近では、ネル・ノディングスのケアリング教育論などにそれが継承されている。近代以後の現代、スピリチュアリテイの議論が盛んになり、癒し、healingを求める傾向があり、それが教育学の対象として取り上げられる時代になってきている。日本では佐藤学氏が教育学の領域で「癒し」のテーマを取り上げていることは注目してよい。²⁵

さて、以下、信仰教育における教育の可能性について教育学的視点から考察する。信仰と教育というテーマについて具体的に注目を集めている問題はいわゆる信仰発達論である。信仰が発達するという議論はかなりの詳細な考察を要するテーマなので、今回は信仰成長論として議論しておきたい。今回の議論は主としてウエスターホフの信仰成長論を機軸に考察する。

2.3 信仰成長論

信仰は神から与えられるものであるが、その与えられた信仰は成長し続けていくという理解は聖書のあちらこちらで主張されているので、これを自明のことと看做して論を進めてゆく。イエスが例えば「良い木は良い実を結ぶ」（マタイ7：17）と述べている事はその一例である。キリスト教信仰は神によって恩寵によって与えられる賜物であると考えられ、他方、人間の宗教心は、存在論的に、人間は神の被造者として誰にでも与えられているものと考えられる（神からのcommon grace 共通恩恵による）。この誰でもの信仰をデューイはa common faith²⁶と呼び、想像力と同一視しているが、人間の罪の

影響と偶像礼拝の危険があるため、やはり厳密な議論が必要となる。ここでの具体的考察はキリスト教信仰を対象にしており、人間の宗教心としての誰でもの信仰は存在論的にすべての人間に与えられているが、しかし、キリスト教共同体に属する人間はその宗教心がキリスト教信仰へと具体化すると述べて置きたい。この普遍的信仰とキリスト教信仰の問題についてはペスタロッチーやフレーベル及びエリクソンの議論を採用して次のように要約しておこう。即ち、親と子どもの間に生じる平安や微笑や感謝や基本的信頼の感情は神への信仰の芽生えであると。この議論については、今回はこれ以上議論を展開しないこととする。²⁷

以下、信仰の成長が具体的にどのように成長するのか、ここでは教会の信仰共同体におけるこどもの信仰の成長についてウエスターホフの信仰発達論と対話する形で提示しておく。²⁸ 教会におけるこどもの信仰教育における信仰の成長の側面を考えるにあたって、ここでは、幼児洗礼を認める教会教育の事例として考察する。また、キリスト教主義幼稚園などにおいて実践されている宗教教育におけるこどもの信仰心の育みについては別の機会に論じることとする。

まず、第一に、幼児洗礼を受けたこどもは神の国の一員として受け入れられその信仰も成長すると考えたい。この点については、信仰告白して初めて信仰が明らかになったと考える私たちは特別な省察が必要である。この場合、幼児洗礼を授けたこどもの親が、子どもに替わって言えばこどもの信仰告白を先取りする形で神と契約し、こどもの信仰教育の責任を神に約束する。なぜ、このようなことが可能になるのか。旧約聖書の割礼を新約時代の洗礼と同一視する時、この考え方が是認される。例えば、アブラハムが神と契約を結んだ時、その契約の印として家族に割礼を施すことが神から命じられたように、新約時代の信者が神を信じる家族としてその子どもも神との契約に入っている者として、割礼の代わりに洗礼を授けるのである。イエスは幼子を神の国の一員として受け入れ抱き上げ、

手を置いて祝福された。(マルコ 10：13－16) 幼子の信仰というよりも幼子の持つ特性としての弱さや依存性から生じる信仰の芽生えを先取りして承認されたのかも知れないが、いずれにしても、子供を受け入れた事実のみが記述されていて、理由が書かれていないので、推測する以外に解釈の仕様がな。一つの解釈としてパウロの「信徒のこどもは聖なる者である」(Iコリント 7：14) と言うことばを手がかりとして、信仰者と生活を共にする幼児はその信仰共同体の教育力によって「信仰」へと導かれる可能性が高いと解釈することができる。四人の友が中風の病人をイエスの下へ運んだ時、イエスは彼らの「信仰」を見て、病人の罪を赦している。(マルコ 2：5) いずれも周囲の信仰者の存在とケアによって当事者が信仰ある者と同等の扱いを受けている。イエスは二・三人信仰者がイエスの名によって集まるところには私もいる、と言われている(マタイ 18：20)。幼子が親と共に過ごし、信仰共同体にいつも参加しているとき、幼子は洗礼において約束されたことが実現するように教育されていると考えられる。

第二に、この幼子の「信仰」はすでに救いを保障されているが、しかし、信徒の交わりの中で次のような信仰のスタイルを通して成長してゆくと考えられる。経験的信仰→帰属的信仰→探求的信仰→告白的信仰(ウエスターホフの信仰発達理論)。この理論は大人の信仰の成長にも適用されると考えられる。まず、人は神と出会ったという体験から出発する。信仰体験をした信者は仲間を必要として、信仰共同体に帰属してその一員として受け入れられることによって安心し、健全な信仰的成長を遂げてゆく(新生児は養う親を必要とする)。しばらく共同体の一員として教育されていくことに満足するが、その共同体の歴史や教派のことを学んでいくうちに、理性的にも知性的にも自分の信仰のあり方への再検討を加える時期がくる。共同体の教えと自分の自覚的信仰のあり方への反省や疑問をとおして信仰を確実のものにしてゆく作業が生じる。その理性的懐疑を通して告白的

信仰へと導かれると考えられる。

幼子は親や周りの信者の行動によって受け入れられ愛される体験によって、神から愛されたと同様の体験として受け入れる。こどもにとって大人は神に等しきものとして見られており、親や大人を疑うことなくすべてを吸収し、模倣する習性をもっている。これが第一の経験的信仰である。それから、こどもは共同体の一員として受け入れられ、帰属意識(自分の居場所がある)によって養われ、そのことによって信仰も成長する。これが第二の帰属的信仰である。思春期になると知的理性的になって、自分の信仰生活を自分の頭で整理しようとする時期が来る。その時、キリスト教について改めて勉強したり、自分の信仰のアイデンティティを問い直す作業をする。一時期教会から離れたり、さまざまな実験や試行錯誤を繰り返す時期でもある。この探求も信仰の成長のためには必要なものとして大人は暖かく見守り、祈り続ける必要がある。これが探究的信仰の段階である。この時期を突破すると、信仰告白して告白的信仰へと至ることができる。

第一の経験的信仰においては感情的経験、大人の愛の態度によるこどもの経験が重要である。ことばは行為として作用するとき、そのことばの意味が伝わる。自分は神に愛されていると感じて人は信仰生活をスタートするように、こどもも大人の愛を感じて神の愛を信じるようになる。第二の帰属的信仰は共同体の中で一体感を感じ、所属する共同体の一員として受け入れられていると感じることによって成長する。共に祈る仲間を必要とする。第三の探求的信仰は懐疑と批判的精神を持って吟味され、真剣な自己吟味を通して個人的信仰の確信にいたるプロセスである。個人的苦悩や懐疑を経て本物を手に入れる。第四の告白的信仰はこれまで回心と呼ばれてきたが、懐疑との真剣な葛藤を経て偉大なる照明、大いなる覚醒にいたることができる。告白的信仰に至ったものは、信仰の確信に基づいて個人的、教会的、社会的活動を主体的に行うものとなる。以上がウエスターホフの信仰発

達論の要約である。この見解は筆者自身の経験から照らして見ても合理性があり、信仰共同体に属する信仰の発達形態としてほぼ認めることができるので、筆者自身もこの見解に立っている。ファウラーの信仰発達論については別の機会に論じるつもりである。²⁹

2. 4 信仰と人格的諸機能との関係

信仰と人格的諸機能との関係について、以下、簡略化して考察する。この考察にあたっては、宗教教育の社会的アプローチを強調したJ.M.リーの見解との対話を参考にしている。³⁰ J.M.リーは宗教教育の形態と方法と内容について詳細に論じた三部作の著作を残している。その方法原理は、教師と学生と教材と環境の四要素を駆使した教育的環境を作り出す努力をする中で、構成概念としての信仰理解から作用する信仰理解へ、すなわち、認知的・感情的・ライフスタイル的行動となって表現されうる行為を伴う信仰理解へと移行させ、信仰の抽象的真理をできうる限りの具体的経験的な生きた現実として提示できるように創意工夫することにある。

(1) 信仰の認知的側面

信仰についての知識から理解そして知恵に至ることによってその認識は深まり、人格全体への影響力が強められていくと考えられる。信仰の認識論的視点から論じた書物としてトマス・グルームの『キリスト教宗教教育』を代表的書物として挙げるができる。³¹

(2) 信仰の感情的側面

信仰の感情的側面として、感情や態度や価値や愛が含まれる。頭の機能というよりも心の機能と言い換えることもできる。そしてこの感情的側面は身体的機能とも深く関係する。神について知る次元というよりも、神について感じる次元である。その人のactualな感じる次元である。信頼する感情の次元である。ヨハネ福音書や手紙によれば、神を知ることは神を愛することである。信仰は人間の態度を形成し、価値観を形成し、道徳的判断力を鋭くする。人間の良心は信仰によってその機能を一層強められる。

また、神からのアガペー的愛を感じることによって、人間のエロース的愛や友愛も同時に機能するようになる。

(3) 信仰の無意識的側面

神の働きかけは人間の無意識の領域にも及ぶことを認めて、学習者の心の中に生きて働いている過去の無意識的葛藤や抑圧をも含めて、宗教教育を行う必要がある。クリニック臨床という言葉は以前は牧師の信者への魂のケアをするときに用いられた用語である。精神分析学は特にユングにおいて宗教と深く関わっている。フランクルやエリクソンなどもキリスト教信仰と深く関係させながら、その理論を展開している。キリスト教信仰と精神分析の学問的關係については別の機会に論じなければならない大きなテーマである。今回は信仰の無意識的側面が深く関係していることを認め、宗教教育における教授法においてその認識を生かして用いなければならないということを確認しておきたい。キリスト教の用語はシンボルとして無意識の世界にまで深く関与しているということである。たとえば、罪は人間の心の無意識的不安や葛藤や闇の力や影の存在及びスピリチュアルな霊的次元と関与しているということである。信仰は人間の無意識的次元をも含めた霊的暗黒や分裂や心の戦いや善と悪との葛藤への勝利及び統合を約束してくれるものとして機能する。教師の無意識の世界と生徒の無意識の世界との対話や交流をも信仰教育は提供し、影響を与える。罪責からの赦しやキリストの十字架による代償的救いのメッセージは深層心理の無意識的領域においても機能するのである。無意識において起こる夢において、神と出会い、神のことばを聞き、神に応答している聖書の人物の事例は数え切れないほど多い。³²

(4) 信仰の行動的側面

J.M.リーは信仰の行動的側面として、「キリスト教生活の実験室」をモデルとして創造すべきことを説いている。理想のモデルとして、ベネデクトによる修道院制度やペスタロッチャーやフレーベルやモンテソーリやデューイによる教

育実践をあげている。このような教育実践には臨床的なワークショップやカウンセリングの要素が含まれていて、全人格的行動が教育の対象とされてきたという。クリスチャンホームの形成もよき事例となる。そこで設定されている教育的環境そのものがキリスト教生活のライフスタイルを築く力となる。キリスト教徒は初め、「道の人」と呼ばれたのであり、キリストが開いてくれた「新しい生きた道」を歩く生活をもって世の中に出現したので「キリスト道」と呼んだ方がよい。「神の国」に属する生活様式として存在しているのである。このキリスト教生活様式はキリスト教主義学校においても入学式や卒業式の礼拝儀式や毎日のチャペル礼拝の参加や祈りや賛美の生活（パイプオルガンの奏楽奉仕や聖歌隊の結成）様式として、重要な学校行事の一つとして位置づけられている。また、ボランティア活動として社会奉仕に貢献する形で表現されている。

以上、信仰は学習者の人格の諸機能に深く関わり、影響を与えることを論証してきた。このように信仰は人格の中核において全人格を統合し、方向付ける性質を持っているが故にこそ、信仰教育においては本人の自由が最大限に保障されなければならないという議論も出てくるのである。しかし、この議論は信仰教育を人間は必要としていないということとは天と地の開きがある。教会と学校において健全な信仰教育は必要不可欠なのである。

最後に、教会と学校における信仰共同体としての信仰教育の実際の姿を紹介してこの小論を閉じたいと思う。

3.1 教会の信仰共同体における信仰教育

真の教育者は神であるから、人間と教会制度は神のことばによる教育の媒介者として機能している。人が教会の制度や教派に躓くのは人間の弱さが前面にでてしまうからである。神の前における人及び制度は徹底して神の道具・媒介の自覚を必要とする。神のことばである聖書の説き明かしとしての説教（ケリュグマ）と神の

ことばの学習としての教理教育（デイダケー）と神のことばの適用としての牧会的世話（パラクレシス）という人間的教育的手段によって教会教育は成立している。神は人間という土の器を通して人間の霊的命を養おうとしている。説教や洗礼式によって新しい霊的命を誕生させ、牧会活動や聖餐式によって霊的命の成長と完成を期待している。カルヴァンは神のことばを教える場として教会を教育共同体と考えたが、むしろ教会は神のことばの学びの場として学びの共同体と考える方が望ましい。神のことばの共同学習としての教会学校は対話型学習のスタイルをとるべきである。イエス自身学びの人であったし、教えることは学んだことの共有にほかならないからである。信徒一人一人は聖霊の油を内に抱えているわけだから、聖霊自身が内側から教えてくれている。皆一人前の学習者として条件は整えられている。真理は神と人との出会い（間between）にあるので、人間と人間の間においても、対話することによって人の意見を聞き、自らの足りなさを反省する機会は大切である。説教に対する信徒の感想や聖書研究における相互の参加は不可欠である。

3.2 学校の信仰共同体における信仰教育

キリスト教主義学校においても信仰共同体は、入学式や卒業式などの学校行事への参加、チャペル礼拝儀式への参加を通して、また、学校が定めた必修としてのキリスト教関連科目を通してのキリスト教経典である旧約・新約聖書の学びの体験、及びキリスト者の教員たちによる態度教育や生活指導及びキリスト教価値観や生き方を通しての校風雰囲気形成を通して、日常的に深く機能している。礼拝の儀式化への参加や神の言葉としての聖書の学びによって信仰は伝承されうるし、信仰に基づく人間形成が可能である。儀式は人間を形成するという意味でキャンパスにおける礼拝儀式は実践的教育活動として欠かすことができない。特に教室における聖書の教授法については、教師の信仰に基づく人格形成そのものが学習者に深く影響する

ことを留意しつつ、人間的要素すべてが神の用いる手段と考え、教師の信仰をモデルとして提示し、学習者が神と出会う機会を祈りつつ、学習者に信仰の覚醒が生じるように、常により有効な教授法を創意工夫してゆく必要がある。そうすることによって、学校教育においても生徒は神との生き生きとした出会いと関係を形成することができるであろう。

以上、本小論は教会と学校における信仰教育の可能性について信仰と教育の相互作用という視点から考察したと要約しておこう。

¹ Paul Tillich, *Dynamics of Faith*, Harper and Row, N.Y. 1957

テイリッヒ『信仰の本質と動態』谷口美智雄訳 信教出版社 1968

² John M Hull, *Spiritual Development: Interpretation and Application*, British Journal of Religious Education 24:3, p171-172 ここで、ハル氏は信仰と宗教を包括するさらに大きな概念としてスピリチュアリティということばを使うことを提唱している。

³ Ibid. Tillich, p1

⁴ Ibid. Tillich, p7

⁵ Ibid. Tillich p24

⁶ Ibid. Tillich, p29

⁷ 聖書のことばの一語一語を神によって靈感された神からの啓示のことばそのものであると信じる考え方をさす。

⁸ Ibid. Tillich, p52

⁹ Ibid. Tillich, p77

¹⁰ Ibid. Tillich, p78

¹¹ Ibid. Tillich, p99-p127

¹² ニーグレン著 岸千年・大内弘助共訳『アガペーとエロース』新教出版社1963参照。ここにはさまざまな神学思想家がギリシャ的エロースとヘブライ的アガペーの相関関係について思索した形跡が叙述されている。久山・泉・吉岡共著『考えながら学ぶキリスト教』川島書店2000 p 75参照。ここでは両者の相違点について、たとえば、エロース＝対象に価値を認識しそれを愛する。アガペー＝対象に価値を創造する、等の説明を加えている。

¹³ キルケゴール著 矢内原伊作訳『哲学的断片』河出書房新社 世界の大思想17所収1974

¹⁴ アウグスティヌス著 石井次郎・三上茂訳『アウグ

ステイヌス教師論』明治図書1981 p88

教師は徳と知恵の教説を言葉によって説明するが、生徒は、語られた内容が果たして真実であるかどうかを、彼らの内面の能力に応じて、彼らの内なる真理において考察していると述べている。外側からの話し手による勧告と生徒の内側での学びは同時発生するので、生徒は先生から教えられたと思いつくが、しかし、実際の学びは、生徒自身の内的考察によるものであり、この内的考察は神の光による照明の力に拠っていると説明している。

¹⁵ オリウィエ・ルブル著 石堂常世・梅本洋訳『学ぶとは何かー学校教育の哲学ー』勁草書房 1984 p255

¹⁶ 上述書『哲学的断片』 p136

¹⁷ 同上 p 140

¹⁸ ローマの信徒への手紙10章14節

¹⁹ カルヴァン著 渡辺信夫訳『キリスト教綱要』新教出版社1964 第4篇第3章p66以下参照。

²⁰ Nel Noddings, *The Challenge to Care in Schools*, Teachers College, Columbia University, 1992 この本においてノディングスは従来のリベラル・アーツに代替するケアリングに基づくカリキュラムを提唱している。

²¹ 森 昭著『人間形成原論』黎明書房1985 p38 参照。森 昭は日本の代表的教育哲学者であるが、著者は生物学的人間論から出発しながら人間は特殊な動物として、世界に開かれた存在であり、自己に目覚めた者として、「知覚されない彼方」としての未来への希望や超越者への「想いを馳せる者」であると論じている。

²² ボルノー著 峯島旭雄訳『実存哲学と教育学』理想社1966

²³ 同上 p 116

²⁴ 青山学院大学総合研究所・キリスト教文化研究センター編『キリスト教と人間形成』新教出版社2004 p290以下参照。この本の8章「近代教育思想における人間形成論ースピリチュアリティ育成の課題に向けてー」において筆者はコメニウス、ルソー、ペスタロッチー、フレーベル、デューイの教育思想の根底に横たわるキリスト教信仰について論じた。

²⁵ 佐藤学『学びの快楽』世織書房1999 p279以下「ケアリングと癒しの教育」参照。

²⁶ John Dewey, *A Common Faith*, Yale University Press, 1934参照。日本語訳として岸本英夫訳『誰れでも信仰』春秋社1956と川村望訳『共同の信仰』人間の科学社（デューイ＝ミード著作集11）2002の二通りの翻訳がある。

- ²⁷ ペスタロッチーの「人間本性を媒介とした神による教育」については拙著『キリスト教教育研究—信仰に基づく人間形成』聖恵授産所出版部1994 p182参照。エリクソンの基本的信頼が信仰と関わる議論については共著『考えながら学ぶキリスト教』川島書店2000 p170 及び拙論「人間形成と宗教的次元」(東洋英和女学院大学『人文・社会科学論集』20号2002所収) 参照。
- ²⁸ John H. Westerhoff III, *Will Our Children Have Faith*, Happer and Row, 1976
J.H.ウエスターホフ著奥田和弘・山内一郎・湯木洋一訳『子どもの信仰と教会』新教出版社1981参照。
- ²⁹ James W. Fowler, *Stages of Faith, The Psychology of Human Development and the Quest for Meaning*, Harper and Row 1981 ファウラーの信仰発達論は世界の宗教教育界において大きな論争を引き起こしており、米英独の三か国においてその是非をめぐる少なくとも以下の三冊の本が出版されている。
Craig Dykstra and Sharon Parks, eds. *Faith Development and Fowler*, Religious Education Press, 1986
Jeff Astley and Leslie Francis, eds. *Christian Perspectives on Faith Development*, Leominster and William B, Eerdmans 1992
Richard r. Osmer and Friedrich L. Schweitzer, eds. *Developing A Public Faith*, Chalice Press 2003
- ³⁰ James Michael Lee, *The Shape Of Religious Instruction*, Religious Education Press, 1971
James Michael Lee, *The Flow Of Religious Instruction*, Religious Education Press, 1973
James Michael Lee *The Content Of Religious Instruction*, Religious Education Press, 1985
以上の三部作が主要著作。今回は最後の著作『宗教教授の内容』を主として活用した。
J.M.リーの見解は大部の三部作としてまとめられているが、その理論的見解を実践したレポートがないので、どの理論を選択して実践すればいいか読者は迷うかも知れない。
- ³¹ Thomas H. Groome, *Christian Religious Education*, Harper and Row, 1979
- ³² 心理学と宗教の関係についてはエーリッヒ・フロム著谷口隆之助・早坂泰次郎訳『精神分析と宗教』東京創元社1953。松本滋『宗教心理学』東京大学出版会1979。島蘭進・西平直編『宗教心理の探求』東京大学出版会2001参照。